



2018年10月 2日

東日本旅客鉄道株式会社
代表取締役社長 深澤 祐二 様

公益社団法人 日本建築家協会 (JIA)
関東甲信越支部支部長 藤 沼 傑
同保存問題委員会委員長 窪 寺 弘行
同渋谷地域会代表 南 條 洋雄



J R 原宿駅 木造駅舎の保存再生活用に関する要望

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴社におかれましては、日頃より文化の発展と継承に深く理解を示されていることに心より敬意を表します。また、当会の活動に格別のご理解を賜り、深く感謝申し上げます。

さて、貴社におかれましては2016年6月8日に、「駅改良工事について」と題する東京オリンピック会場の競技会場周辺の駅や主要乗り換え駅の混雑緩和の計画のプレスリリースで公表されました。そこで具体的な計画として掲載された原宿駅の駅改良計画において、「駅外観（明治神宮側）」に現在の木造駅舎の表現がないことから、以降新聞各紙をはじめとする様々なメディアで木造駅舎の解体が伝えられました。

ご高承のとおり、原宿駅の木造駅舎は貴社の前身でもある鉄道省の工務局建築課 長谷川馨設計により1924年に竣工しました。木造駅舎としては東京都内で最古のものといわれ、第二次世界大戦の空襲もくぐり抜けた歴史的にも大変貴重な建造物です。白壁に木の骨組みを表に出したハーフティンバーと呼ばれる様式の外壁や、銅板で葺かれた小さな尖塔が載る屋根などの貴重な擬洋風の意匠が、瀟洒な佇まいを印象付けております。戦後も高度成長期、1964年の東京オリンピック当時から今日原宿界隈のにぎわいの中心にあり、原宿という景観にこの美しいプロポーションの姿は欠かせないものとなっています。

木造駅舎は度重なる改修で当初の姿から改変されている箇所も散見されますが、建物の価値を伝える外観や基本的な構成は保たれています。この貴重な建築遺産は、長年市民に親しまれてきたランドマークであり、この地を訪れる観光客にとっても、常に変わり続ける原宿の若者文化に対して歴史を感じることができる貴重な観光資源とも言えます。貴社におかれましては先般見事に復原・保存され活用し続けられている東京駅丸の内駅舎同様、この貴重な原宿駅木造駅舎を保存し再生・活用いただけることを要望いたします。

なお、公益社団法人日本建築家協会関東甲信越支部、同保存問題委員会、同渋谷地域会は原宿駅木造駅舎の保存・再生・活用に関して、渋谷区等行政への要望をはじめとして、出来る限りの協力をさせて頂く所存である事を申し添えます。

敬具